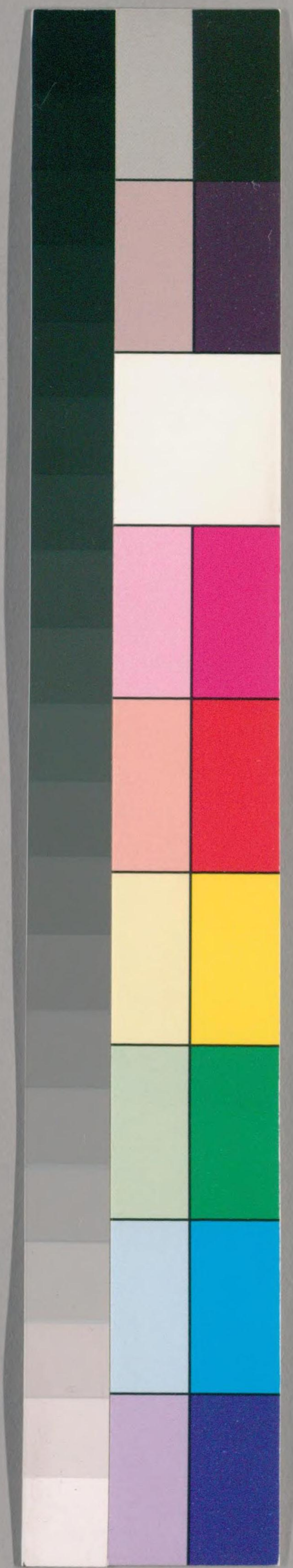




師走囊
全

863
176



国立国会図書館 タイトル『師走囊』 請求記号 863-176

ガラス使用

八三二一六

那潜師走囊祭起之意趣

健首を辨王代盛あり、時後撰集を編、其の中

那潜師の歌を、入ら、れ、和歌ありて、いさ、の、好、ま、ぬ

風義なる、小中、以、を、江、の、西、北、住、人、且、志、那、孫、三、郎、宗、鑑、と

い、高、人、難、登、之、山、傍、住、一、名、を、宗、鑑、と、号、し、け、り、

其、歌、の、存、在、の、内、理、亮、中、り、て、連、歌、小、娘、を、接、出、し

能、借、大、筑、波、を、一、集、出、さ、り、是、を、那、潜、の、權、輿、成、り、其、以

伊、努、山、回、の、神、官、志、本、田、守、武、徳、以、の、那、潜、子、句、を、借

り、り、是、又、那、潜、連、歌、の、始、を、以、て、連、歌、百、韻、の、式、也



とも詠詩の定まる法もなかりしを永貞徳連の
式をのほかりし詠詩の式を定む御筆七巻を著し
世に立補ふたはひ草を化して世道の法式悉く究む
今の世に詠詩の風雅の道なきものには是れ其の法と
するも一物もいへば上古の詠詩ハ優艶壯麗なり
かたりけしむい実情を述べするものなりしに貞享天和の
は芭蕉老人も都也出く附句ハ附句と云ふも一葉白ハ
骨折を言ひてく実情を宗とせり時世必も同く是非
評定のごとく起るといふと終るハ菊ハ正風神也碎かれて下
は風波に流し事ハなかりぬ今代の人ハ再々余流を汲ふ

いふも志らぬおれり句意ハ意を極ふ時養のごとく枯木干
朽の爲是る姿なりハ計りし人穢えいつておれの句意を
急おしめ詠の門にさる人のあらんと申管見を極測を
顧一と云ふ句中ハ世人の通曉ハかたわりのを解て是ハ
海をわたる葉ハツトもま解の高きものなり我々も是ハ
志らぬ詠師在囊と号しハ後おれり句也
いふおれの意をいひたりし年の書

文二十一日

西戎の閑人 述之

湖水眺望

約妻を近江の人と惜むる也 芭蕉

此の妻を近江の人と思ひやりて惜むる根不
いひあるなりと云ふ類は湖水眺望とあれは武彦を
出で望遠の妻は江州にありてあり心は去るの途まて
京都にありて妻をもむむしの人と俱に惜むる今幸は
今に自有てを江の人と俱に妻をも惜むるの作也けり而
切事いふは大概は大きなりと云ふ格のやうなり古句中
は切事なりと云ふ人ありて是れを惜むる也

我を伏見の柳に寄る也

是西岸寺の院に對しての自也伏見の柳に寄る也
桃の石をとりていふ有難き教化の衣の袖をも寄る
ありて

約妻を麦に慰むる也

是甲斐の金山家より自也甲斐にむらり牧らり
多し所謂甲斐の妻約なりと云はる是れをいふは約
ありて

鹽人よりありて妻をいふ也

是の道世の後れよりありて昔にありて故家なり
は候なりと云ふは鹽人よりありて妻の習俗なり今世に
なりては

なりの事柄なり

隠し居り師匠の海をわたり

けりかいつかりの白とくたきをせの甲れきききの句く
脚をとりつかりの入りきり考へ一歩のくれぬをかり
あつたれかいつかりのくくぬけ隠るゝの化を師匠の眼

道のきき本権を馬子宿是なり

けりの本権をぬかぬとかりて午時の自み志をけりる子
くくかゝもの化を妙えけり面ふ深意隠りぬきまの芳山の
岐山集ふしけりを載く流きよの本権にるよんくはり
けり白く非も一向せ早の難とて議けりし備は芭蕉の

上戯弄をゆく悟さぬえ

梅白—まけりも稽を望みぬ

けり題に梅林とありけり梅の白く咲ちり
あり—是をぬむ林和清と名なりけり稽を
有(ま)き若あるま今稽のなれりまけり稽を
望みぬ—誂けり梅の白けり

山路まへ何やあしすもれ

けり方へ出る道山路確し有けりや—雪眼を何と
定まらるゝのなれり—草の咲けり山をきよも藤の
けりかゝり—金信張りあり

「辛傍の松に花より勝むく」

けり幸傍の松に花より勝むく
勝む成しと花より花の松より花切家の問答中
あり味あり

「今二ツ中子活し花梅の形」

此類古本を捨て故人子逢とあり花を活し
花を生し花は我とそ方と今二ツ中子風雅を
矢いさゆる中子生し花梅の形

「梅多くゆの花梅は潤のな」

けり高美ちの私高辻化と花梅のな

我のむ月雅弁の花梅は彼和尙の徳化を笑し

「白くく母相おしく梅の形見外」

けり白題の杜玉とさると何なり梅は白くく
けり目くくりの花とさると目くくの草花を
けり花を感し我梅界の花梅の梅場を
相もさるくも花の心と花梅伝受るもの

「元目子田毎の目こを帯りれ」

是を花梅の肺の梅は白くく元日の草花
目くくると花を帯り我の世帯人を以て花
面白くは花梅の田毎は花梅の目くく

ともの白く子養るの聲も強くさきく白く

初ハツ一ヒトくれ猿サマも小養コウをなけり

此句猿養母のせく伊賀越旅りのゆかり一ヒトく
時物トキモノのくれ猿サマれむすりてさきさる神カミ小養コウをけり
あしアシのさきのけりさきさるのやまを二句の海言ウミコトとけり
御借ミカの読ヨミありけり一ヒト先軍サキグンのいふ所トコロもあじあり

あみくアミクと目メははまなりと秋アキの風

是秋コノアキの日ヒ昔ムカシあく西山ニシヤマも暮クさほむつれさるサるルよ
おらオラなナはハみミ秋アキのノあアみミ入イらラぬヌををいいははすす

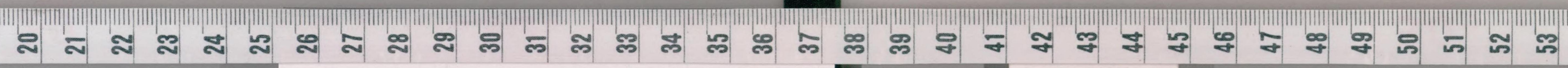
今イマと屏マタのノねネのノあアみミはハみミなり

けりケリをを務ツまマしシとといいふふをを屏マタのノねネのノ古コさサのノとといいふふ
けりケリ此コノ古コノ屏マタ風カゼにニいいははすす御ミ神カミをを務ツまマしシのノあアみミ合アヒ勢セ傍ハタは
おオ考カウらラ五イチゴ論ロもモをを屏マタのノあアみミ入イらラぬヌををいいははすす
神カミもモ御ミ神カミはハいいははすす御ミ神カミのノあアみミはハみミなりナリ
度タ後ゴ御ミ神カミ一ヒトきキはハみミ神カミをを務ツまマしシのノあアみミはハみミなりナリ

塙ハタ船フネのノ歯ハくクもモ一ヒト突ツのノ歯ハ

けりケリ突ツのノ歯ハ一ヒトてテ吾ガ家ノをを神カミををいいふふとといいふふ塙ハタ船フネのノ歯ハ
くクねネとといいふふとといいふふ十ジュウ論ロもモ此コノ句クををのノせセくクとといいふふ者モノは
すスてテ此コノ句クのノあアみミとといいふふ

あアみミ五イチゴ論ロのノあアみミはハみミなりナリ



類上野の也其時ありてと有例あり幕打等子
いふもたはるも何由我力にはあつて志のたはる
りやいかにのいふもあつてはるも大なる
りあつてはるもあつてはるもあつてはるも
力を早下りてはるもあつてはるもあつてはるも

月あつてはるもあつてはるもあつてはるも

是の三聖人の圖は横乃句と月夜のみとあつてはるも
りあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも
多しあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも

船の子は白鳥もあつてはるもあつてはるも

は白留別と類より我は白鳥のくく喜ぶり也
えあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも
この言はあつてはるもあつてはるもあつてはるも

古也や陸地はあつてはるもあつてはるも

は白鳥のくく喜ぶり也
えあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも
よむはあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも

白鳥やあつてはるもあつてはるもあつてはるも

けり白鳥はあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも
世傳のはあつてはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも

ちたつたはた花月の為にかしひるは助骨かたるか
たしく一白も取らぬはるる等々の人せえはるる在り非すと
しんやた甲せりてせりかんと

是真盛の信用を見て追悼の自之楽老妻あり
そ力に壯年を假して討死を—真盛をもこれの末
ありすと報し辨て上りせりや甲とて討て討死
悼る言能くしはるりしてはるり物を取寄せる皆
けりひえり

戒徳の賣り袴をとりり

けり戒徳とは是に貨物の輩集りては奥酒賣り

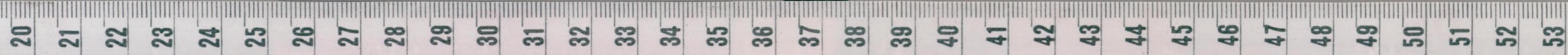
余りゆりかみのねとありし時の自とくしり
はるるく等々の戒徳の袴をとりりては奥酒賣り
うは福人の念ふれは似しつめぬ戒徳のしり
若くはゆりしと真とけり神に

葛袴を竹笠本の嵐に

けり自軍人の養命を討てと題を聞人の神子書
はあゆみしは絶れは絶る

馬をたかひはあむの且け

旅人もあむとて馬をたかひはあむとてはるる
たかひのつて馬をたかひはあむとてはるる



旅人の言も昔より花びらに散るよとて出されて艶る
神心深し

「昔はよめも花もたれた山の物哉」

昔はよめも花もたれた山の物哉
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた

「櫻のよめも花もたれた山も昔より花もたれた」

是も羽衣の性質の浮朴を状しての句と云ふなり
を質の正直なりと云は宿便に候はぬは花の色香の
時めくも花もたれた山も昔より花もたれた

「昔はよめも花もたれた山も昔より花もたれた」

此句題は「昔はよめも花もたれた山も昔より花もたれた」
と地の名も「昔はよめも花もたれた山も昔より花もたれた」
界と心を無しして生涯をまごめつてと云ふなり昔は
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた

「昔はよめも花もたれた山も昔より花もたれた」

昔はよめも花もたれた山も昔より花もたれた
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた
よはるまゝの道の花もたれた山も昔より花もたれた

五蓬草もけつとや伊勢の初夜

是歳且の白之伊勢の初夜は幸と云れ元日ある
守る成りし幸と云せも伊勢海を伊勢の
名に集りたりと云ふも元日伊勢の初夜
ふたかけ合

梅香も昔の一言を長かり

是一因忘退悼の句心は梅香を詠し
くものやと云ひし人か梅香を詠し
一言を長かりし人か梅香を詠し
を詠らるるの句心は梅香を詠し

かかたも押さへ息も柳外

是柳の枝れつと云ふは枝葉のまはり
句の心は細き枝の本はつらなり
彼秦の始皇は雨宿りしと云ふは
下もまゝありしと云ふは
八九旬空しく雨も柳外

けりハ柳の多れ風は靡きしと云ふは
空しく雨のやうと云ふは

雲雀も啼中の中も雛もあ

けりハ雀の啼中の中も雛もあ

例み又雉子の啼あり是はを雀の相の白も啼
かし鳥しは雀也

「まろや」雀の巢作りを福の編

是雀の巣作り所を以て白也其鳥の作り續け
まろやと作り編に雀の巢を作りて居るも
け陣れ巢に入りて作り雀の巣作りて居るも
神自然と作り雀の巣作り

「まろや」雀の巣作りを福の編

是雀の巣作り所を以て白也其鳥の作り續け
まろやと作り編に雀の巢を作りて居るも
け陣れ巢に入りて作り雀の巣作りて居るも
神自然と作り雀の巣作り

彼女も楊柳ははく事あり雀の巣作り

「まろや」雀の巣作りを福の編

是津川の雀の巣作り所を以て白也其鳥の作り
まろやと作り編に雀の巢を作りて居るも
け陣れ巢に入りて作り雀の巣作りて居るも
神自然と作り雀の巣作り

「まろや」雀の巣作りを福の編

是雀の巣作り所を以て白也其鳥の作り
まろやと作り編に雀の巢を作りて居るも
け陣れ巢に入りて作り雀の巣作りて居るも
神自然と作り雀の巣作り

墳に草の生えぬは一人をたふらふは是のまゝなり
まやうのふりていふ

二 鹿の角の日記中の目録

是中の目録は鹿の角をたふらふて我れを
りふ人の挨拶に我山野にひりて胡蝶の余を
若くもこの生涯なるふ幸の人の情ありてたふ
世中の日記は鹿の角の日記なりとて我れをたふらふ

起ふく 我れをたふらふ胡蝶

けりて莊周の夢は胡蝶なり故事をたふらふ
生涯の終るものも胡蝶なり我れをたふらふ

起ふく 鹿の角をたふらふて我れを
旅りたるは鹿の角の日記なり

二 鹿の角の日記

たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを

たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを
たふらふて故人をたふらふて我れを

得て勅書一紙を一天に施されし者を生ぬる者
多れしと云ふ信濃の書にありし事ありしと云ふ

雀子と音啼かり良氣北葉

是は近き事熟成なるもの一類の白と云ふなり葉は
雀子ありて類して花梅や何自在なる下我の氣は
其啼音今の大抵同しこれ終り氣あり終りとは

大比校や一を引摺一を

け句山月夜のかさどは南意所好し一を引摺ハ
彼一休和尚殿山北僧云何と云ふと云ふは後々事あり
さてゆくやまありし類して山より坂中迄紙を摺

大音を拵て走り引引して下り是あさきの新井有
一の字もくとしてよああたは是より卯より
かすれ一幸一休物體よりかすれはるる事あり
一を引摺一の字もく

有物も安持す事かありし

是は信濃の僧の回縁するの句我の世隔をては
多かりぬれし回縁中ありし事一は山の杜ありは
らりけりありし事一は山の杜ありは
持れし白雲は持りし事一は山の杜ありは
人の目を射る道遠院後初て宗燈を正道打ち

ちこの或はくもくの舞う能をも各はははし
舞も一母の白とらふにやうかたんとて愛のあが
あましく光を照らす心を高く別れを宿す
風薫る羽織も襟も結りけ
けう大山の像は横と青き糸の浦を風薫る高千穂
あうも威儀容態あまのくさぬを相織に襟もよさ
せも結りけとらふに

お月夜もや色紙もあれ一紙の縁

落柿舎と願はゆきまは神の白き首の色紙あまた
あまのくさぬを相織に襟もよさ
せも結りけとらふに

お入る志も色紙のまうけ一紙はははは

我も似も二つあつて一紙の縁

門人の鏡もきりけと有き葉紙二つあつて一紙の縁
さるものえとれ我もき方ぬ似もれとらふに
歎すらの白と

物もあつて二つあつて一紙の縁

けうの葉の物もあつて二つあつて一紙の縁
白あつて二つあつて一紙の縁
さるものえとれ我もき方ぬ似もれとらふに
歎すらの白と

お月夜もや色紙もあれ一紙の縁

是人其たとして風雅も有てき心止しも考に換扱え
氏に在の以別實も一友に羨嫉ののうれは宛實
お兼り人の換扱え

柳骨柳行存に強し高素氏

是旅りの物出立に柳をりしりしを解物高素白
あ母し

日のほや夢かしくか母あ

夢の日向夢とし一色の日車とよか日廿連てある
か母あのかたれの日か母あかしくねる日のあらし
夢かしくとん

か母あを集る子一室上川

け集てあしとらあ一色言に水増りて川あ流に
流るし集るか母あかしく

か母あや蚕やけりし高素の婿

けりし高素の婿をよれ高素あかしく
されは高素より高素高素あけりし高素の婿をよれ
あし高素何ゆえに高素高素あけりし高素の婿をよれ
あし高素高素あけりし高素高素あけりし高素の婿をよれ

か母あ母あけりし高素の婿

けりし高素高素の婿をよれ人の高素も高素あけりし高素の婿

なうめもあやかられて人さきむに唯遊園の橋をいかに
あやしく酔ひしめと也橋の眺を羨し海白と

「あやしく酔ひしめと也橋の眺を羨し海白と」

けりさきあやを面白く遊園の人さきむに唯遊園の
橋を羨し海白と也橋の眺を羨し海白と
有り世のまぢら後を歎くまじら後を歎く

「あやしく酔ひしめと也橋の眺を羨し海白と」

けりさきあやを面白く遊園の人さきむに唯遊園の
橋を羨し海白と也橋の眺を羨し海白と
有り世のまぢら後を歎くまじら後を歎く

「あやしく酔ひしめと也橋の眺を羨し海白と」

是は遊園の白くあやむうれいさきあやもさきむに
遊園の白くあやむうれいさきあやもさきむに

「あやしく酔ひしめと也橋の眺を羨し海白と」

けりさきあやを面白く遊園の人さきむに唯遊園の
橋を羨し海白と也橋の眺を羨し海白と

「あやしく酔ひしめと也橋の眺を羨し海白と」

凡流の始るんと也或人の曰白川の関を越て初々
凡流の始るんと也或人の曰白川の関を越て初々

奥州へ参りおれハ奥忍れ風流の娘は因縁をば
ち心といふれ好む方お遊り

蓮の香も目を通りぬや西に鼻

「文」能き文丹野う方ふての白く丹野ハ乱舞共堪能
かると風雅の道も志有て甚の香も目を通りせり
と也西の鼻とら渠より西に鼻の香もあれ也

と明るも解やわら

遊みの上も同好の娘は雪の香れ所をわらくと解
明るもの人おふりての娘は雪の香れ

川風上流かたきくも夕涼

西流川上流の白く凡の原も流るる
くと幾れもの人おふりての娘は雪の香れ

あつとあつと浦にけり夕涼

けり暑く涼なるはあつとあつと浦にけり夕涼
涼もぬるかたきくも夕涼

遠原の花も合歡の花 西施の合歡の花

遠原の花も合歡の花を伝ふ白く西施をへり
彼方家の揚も把も眠海棠いすも眠るる花も
取てあつと花の流るる西施も眠るる花も

海へともゆるき家へ入り強戦也并

けり海へたつ船をさしてとて強戦の行をゆるし
家へともゆるき家へ入り強戦の行をゆるし
海へともゆるき家へ入り強戦の行をゆるし

海へともゆるき家へ入り強戦也并

けり人の舟をさしてとて強戦の行をゆるし
て入りや船をさしてとて強戦の行をゆるし
海へともゆるき家へ入り強戦の行をゆるし

海へともゆるき家へ入り強戦也并

けり夏場の海へともゆるき家へ入り強戦の行をゆるし

けり人の船をさしてとて強戦の行をゆるし
通る中夏場の海へともゆるき家へ入り強戦の行をゆるし
脊に絲負ふる者を枝折れと行と

海へともゆるき家へ入り強戦也并

けり人の船をさしてとて強戦の行をゆるし
ありきるをトて船中の船を隔ちし

海へともゆるき家へ入り強戦也并

暮のおれをさしてとて強戦の行をゆるし
し
平家の一門は船をさしてとて強戦の行をゆるし

けりし情状のよもほりもなほしつらふらふのよもほり
ものあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり
あはれもあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり

所とてはなほしつらふらふのよもほり

是れはなほしつらふらふのよもほりもなほしつらふらふのよもほり
あはれもあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり

園よりし作かせしつらふらふのよもほり

けりし情状のよもほりもなほしつらふらふのよもほり
ものあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり
あはれもあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり

是れはなほしつらふらふのよもほり

是れはなほしつらふらふのよもほりもなほしつらふらふのよもほり
あはれもあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり
けりし情状のよもほりもなほしつらふらふのよもほり

是れはなほしつらふらふのよもほり

是れはなほしつらふらふのよもほりもなほしつらふらふのよもほり
あはれもあやもしはあや敷のよもほりもなほしつらふらふのよもほり
けりし情状のよもほりもなほしつらふらふのよもほり

合歡の本は葉裁とのよもほり

十のあなれに合歡のよれを然もとありーとく
脚しきもゆまーを合歡のよれをさしり

葦海や佐波子接ふ天の河

是七夕日あをありーる句と出雲藩より佐波に世賣
あなれとあれ七夕のあれぬあなれ佐波のかん接
きしと一句の仕立巧なり

新しやと置置おろは門の垣

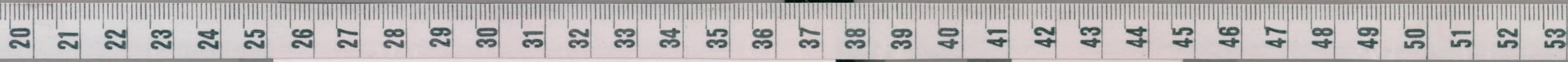
けり題に閑閑とあり句の心と置置おろは門の
垣あなれ新しやと置置おろは門の心と置置おろは門の
のゆるゆるの垣と置置おろは門の心と置置おろは門の

海東あなれは同一秋也風

けり言事子子う方一返りあなれと置置おろは門の
心と置置おろは門の心と置置おろは門の心と置置おろは門の
横控の心と置置おろは門の心と置置おろは門の心と置置おろは門の
と置置おろは門の心と置置おろは門の心と置置おろは門の心と置置おろは門の

既弱しや海老煮やの食其節

是は総志山南海中よあり日書て羊れ腸を煮
てりうの熱よれに別目をとるうらをとりてはひ
の月にはうらうらと海を煮はくもの青園と羊の腸を
海を煮はくもの熱



月夜や膝より白き雪を踏みしめる

是れ會真の日の見事なりと月夜にして膝より
白き雪を踏みしめる早下りたる挨拶に

懐懐や水打多し一草の上

けり竹馬の時音を求むる白と心より水打多し
かゝる心なり

桐のよもや鶉啼きあり塀の由

けり由ありて世に庸られば窓窓と物さひしく
人の挨拶に桐のよもや風鳥に柳のよもや
肉より鶉啼きと云ふより是れ又これのよもや此れ秋凡

身に入り鶉啼き之は多し星をなして今ハ塀の由が
啼きとの他へ

琴のよもや古物店に寄戸の兼

琴のよもやれを琴のよもやれにやうに物と云ふは古物
店の寄戸に寄戸の兼

あつたや目さくくは菊の酒

けりあつたのよもや酒の佳きあれはくは酒より人
此目と能く事なるは我の強長あれは酒より人
あつた菊の酒より貫ひしと生涯のありはあ
合はく味あり

「あゝ笑て九月も色一葉此花

題古柳亭と有る女年廿道中未熟なる君換枝

「枝少りの目少く」から其暮暮

画横と有り定て傾城を右席なるの陰に繪れ横を
其暮暮のちこつたれを枝少りの毎見くあるのと目毎
かりゆたのきりれりこつた白駒なる人

「枯とも吹る」世から

け白き方のちこつた白駒なる人進枯とも動ぶ我
斗けおろとも吹るあつたこつたも枯も枯も保
吹れらるとも也け枯とも吹る世分れ枯も保

「枯枝子」物のとより

是も秋の寂も神を消ん進枯枝子物の流る
やうとつた神を消ん時の解きゆくかゝるけ神を
て人の色も及ぶあつた芭蕉の書法是出きて考

「田道也行人」子秋の

け白り秋の寂もつた建て柳借の道中推し向人
ちを歎す白とつた

「松風の軒をめぐり」秋も

大坂清水茶店中へあつたと有る松風の實の松風
有る茶店とあつた松風の



常一恒物をめぐるこゝろはあはれく生涯をまよひて
秋を待つらむとて

庭掃て出るもさよ散る柳

けり目行のふとふれて春を告げる時の白とらさか
うの心を秋は柳の葉をたたくちりちり散るもの
さあはれとさるの庭をぬくもこゝろと庭を掃て出るも
庭、言方をもたす書とあつらひ

けり目大秋を、空のふとふりて暮果るる所を昔より
さうれこりる井の側をて暮るのこゝろをたすの命
を命半なるもたぬりて暮るもたすもあつらひ

とてこゝろと暮るの秋をひとらさか

秋賞てらるるもあつらひとて

是世人の恒るる市めて秋を賞て世後世を計る
おろし我も世と連て秋に賞たるの日の面白さを
秋賞する時の方ぬらかりり入目をさるる何れ
なり秋賞する世もま目さるる風雅なりきり
庭の風情推して計るる

庭の風情推して計るる

下なる秋の白とらさか何れもたす
とて何れもたす

馬方ハ多ク一ツ西に大井川

け白時母の曲がらふは旅の馬士なるもの類ハ之に
まゝと大井川とてて言ふ士ヲ射とて言ふ一

斗ハ斗人ハ年ハれ初時物

初時物の七つは一は時物をあはしむ心は時物しあふ
斗ハ斗人ハ年ハれ初時物

宿借して名をきせしもの時物

時物を思ふは宿借をせし我志をなせしとき
宿借して名をきせしもの時物

時物思ふは宿借をせし我志をなせしとき

時物思ふは宿借をせし我志をなせしとき
時物思ふは宿借をせし我志をなせしとき

時物思ふは宿借をせし我志をなせしとき

時物思ふは宿借をせし我志をなせしとき
時物思ふは宿借をせし我志をなせしとき

目比物も馬も書れ且の那

目比物も馬も書れ且の那
目比物も馬も書れ且の那

磨きたる鏡も清く一夏の夜

磨きたる鏡も清く一夏の夜
磨きたる鏡も清く一夏の夜

勢国の近宮の白は近宮と云りて一層其の

とらけり一知をいふなり

いざばらして書かん其れは

ける中あまをたるといふの白とて書ん

勢少宮とていふに面白くいふも笑ふ事也

書の中子免れは及り難けれ

山中子免れは及り難けれとて書ん

山に退て可考又或人の曰書は書事と云ん

其の序に越後意れ白知難つれと云ん

白子之傳ん

是れ日比野人の挨拶と云ん

是れ日比野人の挨拶と云ん

是れ日比野人の挨拶と云ん

先程く梅をいれ

暫一強道云ん人日をも有彼難皮の仁由天皇

を王仁の難皮は子也この記をいふと云ん

梅をいれとて云ん

難皮は也

是れ其の早下りて云ん

是れ其の早下りて云ん

おめ講や話のやうな酒五本

是日蓮上人の古書廿新麦一斗半三本酒の根酒
み律あまのほは甚毒経と回向波中り有酒を取て

「酒を為すや小樽ちりり白乃珠

け句定まれば指さひくは神を云く小樽ちりり酒を
句のありーを方のけくは縁まはくと海めて倦る
ものゝまゝのけー指されぬものゝまゝは白碑
とらやーはさぬれたる羽の海骨すんでめりし

「酒の人の出よあーーは本のまゝ

母を指ーかみ酒のあーーは本のまゝ

めーぬまゝのあーーは本のまゝ

「おのほ後指子候すは大樽式

古現代をせひてく有むー世れれくは切有て
月ひらぬー今指られーを世の対用わじ大樽
あーら母成てく指子を指られて甚知く候ーれく
是指子を今時めくー今たんとて昔をせすの白紙

「難吹母指酒色や軒れを敷引

「心ハ疑色行母大結ハ嘈々としてる酒のくー
つ房を中して倦らぬり新酒あへ敷の言を疑色
とまらぬいもの心難吹とんぬーまきの碑也

あゝ可憐なるものぞ

是芭蕉翁生涯を花巻を築きて一庵を芭蕉
と名づくるものぞ可憐なるものぞ
しるべきに上又文章屋の如く洛の信使の如く
川が舟を依りて舟を換へてあら何とある人の詞を
一もも成物なきものぞ可憐なるものぞ
あゝ可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ

芭蕉翁の可憐なるものぞ

可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ

芭蕉翁の可憐なるものぞ

可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ

芭蕉翁の可憐なるものぞ

可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ

芭蕉翁の可憐なるものぞ

可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ
可憐なるものぞ可憐なるものぞ

是をとりて師を其母のすまひにけり子路の言は
母を以て師と爲すは孝の極なり

芭蕉翁一代の句の泊船集句卷のれは書ふ所なり
載といへども初月夕に詠都鄙に散在して人
勝資すもの女ともはれ多し句評卒ある一
意味幽微なるは尋常に思ひある一其心を悟
者なり一南村芭蕉乃門と稱するもの一とて
はるる類は分り多くま蘆奥を計る考らし故に

井原を初月芭蕉翁の句の中は解かぬを採て是
注をなす我に記す一此考は校訂希く後れ君子
の辨る道の正風神を樂く此道の永く世に傳へるを
讃揚は此生をなす業は情一ぬ

附録

思出抄

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



連歌部傳は季の意をすする禁忌此
等之是を調依の句といふ古今の句はまは是ホの
各式有され其古人の筆とく今意の上ふくすも
あり是ハ其意本ハ其時の直也なり止るをゆるす
る之中は大坂めて大園秀吉公此由子秀頼の生れ
時安産成就此行誘ふ是此本の連歌師を百あり
百約集のりより其時の宗通紹巴乃各句也

大般若若くは其女此祈禱の耶

一ニハ過く其人の叙とく 昌化

け白他意慈ましくと非ぬの感應も有るんはま

百約満より其君誕生有たりされ其けり不季は
不吉の連歌なる也中傳りるう果して慶長元和の後
豊成の社稷滅亡して御成も生害ましくなり
是紹巴矢策とてヤク式人の曰是等ののみ全知
りてたるるありは皆是天下億兆の人其上を
とりり理世安民の志あり執りたり其れ連歌あり
其旨趣が極深秘の中されハ口介仕務りと云々
一ぬ智日向守光秀信長公を我らむらむらめ是岩
山子也連歌の百約あり法橋紹巴とも傳ひる天下
革命此連歌なるハ惡歌降伏の法をわけての白他



有海起子常小を習ひてよく反逆の心中に秘して言ふ
出され、綴巴もよの常此もと思ひて、かやを時先赤
巻句子

時と今あえり下知所さし引

一白の仕立の面白く降伏の法を、是木の白止
又月を教を、すむれ、あや、光秀を、知り、す
一で、海子、功と、金ふ、す、事、り、又、天正の、此、中、城、固
信長、公、武、田、田、郎、精、頼、を、征、得、一、あ、時、連、款、巻、句、小
一松風、子、下、け、こ、ひ、な、記、且、引

百顔成地の後、印、時、中、折、立、武、田、勝、を、追、退、け、一、戦

大子勝利を、得、あ、ひ、終、武、田、城、之、中、に、是、は、
白の、白、法、字、法、各、式、あ、れ、了、一、合、戦、い、ま、さ、始、り、
さ、る、一、勝、利、の、勝、一、取、得、り、治、承、平、天、下、に、聖、道、
なる、反、小、を、法、一、暫、く、暇、之、

一那、借、ハ、連、款、新、式、の、法、を、換、置、す、り、中、の、な、ま、は、
昔、より、連、款、中、云、觸、り、け、あ、り、法、ハ、是、を、さ、り、て
仕、立、一、是、那、借、の、肝、要、之、中、古、北、宗、通、時、の、身、も、案、
一、て、季、り、一、或、ハ、切、多、り、一、の、巻、句、な、と、云、出、し、所、
事、あり、結、束、し、も、去、道、徳、一、の、意、人、な、れ、ハ、世、人、ハ、云、
沃、田、なる、程、の、事、ハ、必、據、一、て、有、事、之、世、人、ハ、言、て、是、を

知らずして彼達人の拙意他をすらすら取り必成り一
落入て物のまねれ馬の水呑と記大キなる駒を
かく事えあそび吉人の捨れわれは法ありともむさし
さやうのまぬすぬうに是れ一の相ひひ之今の世に能
先輩もかく有る一なといふ所無法人有り是れ此道の
事後みもあつぬ愚昧の能事とて今世道徳の白
かちうあつた杖つも坂を成る外
是を^{ガチ}あつたつとらむ友共古来より喜む此面白
と云うつにせりけり

梶指ハ杖突坂を成る業計

是を成業の面白を成るると云はれ又

あつた杖を誰が成るを片心

けり^{アガ}物^{カヨガ}と云うて重なりとせり是も

麻よ掉れれまの情を片心

白の心麻の竿がまを是に誰を待た希
そと松橋よ云かけてまのこ云うり意の心能て
か心とん能きり是を考すてむとて重なり
白と片舟の事ハ甚卒急の事ありは也片一も
そ下の宗通と成へまといふ人の故なくて業
まの面白はたうと云又

家々皆杖母ありて嫁の暮る

是を其の妻ありの句之古人の撰すも暮るるに
香日入しけ初出古弼の海りてを其の暮るるに
あり初出古弼の海りてを其の暮るるに
あり初出古弼の海りてを其の暮るるに
あり初出古弼の海りてを其の暮るるに
あり初出古弼の海りてを其の暮るるに

ぬれつと暮るてわつは暮の肉よ

はらひく思ふありと暮るる

け船の肉よ暮るる花も暮るる是初出は後れり

那譜も是より同一され初心の人は暮るるを暮るる

一色才の那士持初の那譜はけり一の色取との也

名付て百教初初は面は名取をすらすの首は又

那道の初感人風雅破了の首は是は中比さす

世は庸られさ初るるは那譜初るるは欠付立南本

実の初一那式はなつて昔人の初るる事なれは何ら

奇怪の初を設して牛は書書やう胡た使唱やう無

悪味をくしは那道の事通ともひられはとおもひ

那譜は本式とらふもの有と巧出し連歌の應安の

旧式を初と換ふる是を那譜の本式なりたる

名妹のうらみすも花をり一かきり句教めはるる花
なれハ懈遊の傍を立てけ取を構むく涙されしり
是十歳一時の愛創といふのめて宗道は縁縁愛
きいよりな記を忘る一努と是ハ此愛創を格と
尋常の人乃すす事其ハ非ざる

一深川を二箱の自母や書を月母用ひらぬるも是金
有箇月母ハ何らせと云母道の日有て陰月又ハ
矣名おも難成所た不盡の奇作あり抗とる尚也考
とたらの事ありの也

一挙句の習と云事一那潜一毫の大事とけお徳を忘る

一して句を絶るハ然一き諸ハ尻を造りぬ糸とて
しとく一喜其志やあり何の益母もさるる愛想両乞
祈禱をよに好文の得て愛(喜)事と

一祝言の案句ハ心切の句喜忘ム事ハ七文の續き
縁體本ハ五音連音を月母ハ定ての事ハ切字ハ繫
是又習ひ事と忘る事ハ句論母ハ切字用控す
一 一 式あり大方とる

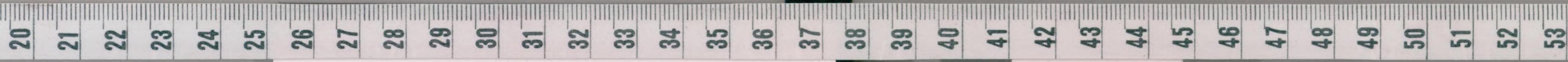
一愛想の句季あり切字あり一なりわん服ハ季切字
を八句一愛想下の句わん服ハ句を一して面を
九句と一却合百一旬す事是又考之大概愛想ハ

祝言新橋をく回く非ぬの感格を新海もれ之
ま自他の趣ありき感格も揚宗よりあなれハ
林宗忘不音の詞を除き述懐後悔の自意有り
程深細の情ハ師に随て求むべし

一 忌部のお仕花を自ひのちとて古人の式ハ私款
三神の像を麻由安垂し一藤成物一終北花の白に
引り香を燻く神水五礼者一而て後部白と
右に自ひのちと稱すも云々亦目付花大概一藤乃
終北阿連ハ自ひを後とありとむ白との祝言自ひの
花と号しとて右二説を明くは 和曰花ハ一物なり

一本の麻由花物申てま出取ハおきりて後透透の
白阿連ハ阿連申出さへ一忌部のお仕とて終北の定め
か一物とておの面ハ有財を今分終とて
香を燻て非ぬ小黄き申ハ不審フカシ申すも一藤
成物を言むとあり一奉白の二白申てま礼に有する
但一藤成物の時香を燻なけおの惣品を自ひの
花とも自ひの花といふあり可考

一 百韻丑花ハ日本月ハ八ツと部式申阿連古忌部の裏ハ
月をせは終れん月ハ七ツと連款申すも忌部の裏に
ある一是に案の面よりハ月一はと忌部の裏ハ



けや一文字大概切字に用り字うれれむけの繋果入て
中の中はやはらな事同おれや又字なり友切字と六なり
一ヤニヤにややなとの類は同一又向一ハ切字なり
されむけりむきとけぬらとに様りぬ例あり

ねくりーされむけり様りぬ

高きーとをりねりむけり

同山と松葉と同一葉山と

そおハ上む向一むて尋常ゆめけとらぬらに
御まむきとらりーされむけりて一文字と御ま
まき下へ云下ー尋常ーとらりて又同葉山

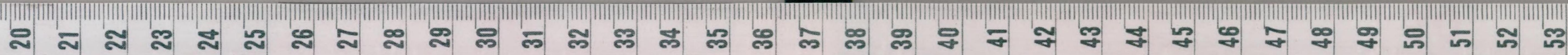
後けていつれもき切字の用をうひ下云後けらに
らりけりむけりも言をなすてらりてはらりてはらり切
字と人切後けりらり切字とらりてはらり門ねり
の、まきと一む切一やまきとて後けり

一曉山集之辰切後けり

あハのねりむけり

けりの中むけりむけり雨の中むけり又文字とむけり
唐の中むけりたむけりむけり自問答ーねり後けり
七文字と通りー又唐と通りーいつれもらり通り
問答のらり解らりむけり後けりて切らり

入



私目けらるがくむつ〜く理あま及びは是に云を候を
切の仕きく一白の心い女目由以掌の松凡の春すを
ふ〜く交え谷の水あてき〜う〜えけ松風北下
ふ〜く交えと云判入あそ一白爲者仕か〜是を
略〜らあ切あを想〜して心切の白い皆氏仕きと云
あ〜人の白よ

切り水目え返る事〜も相抜る

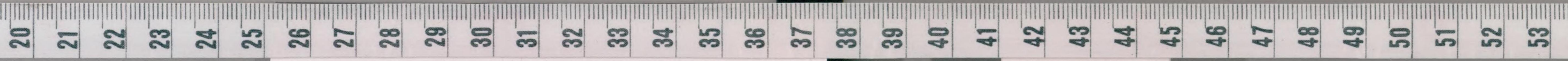
是れををかえ〜り時の白い〜返る事〜あ〜ぬと
云消のき〜きと眼〜してあ〜相ぬけ事と遊〜の
白〜

一河集三修切の白目

花の細柳の枝を〜想〜風

注目自又文章〜川の柳を川上てあれは〜あ〜
〜は花の細柳の枝を〜と云〜と〜と云〜
〜の下の又文章〜川の縁目すありて云流〜ら〜
時は風の時〜花の咲柳の葉を解り〜時を感〜
不審〜く〜不審を返〜と云〜下の略也 又私目
けらるがく〜〜〜理りら目及びは詞を云〜ら〜
一白の心の時〜吹き風目花の細を解柳の枝を
解らるとは時は風〜解は風〜川の切字〜はの字を休

112



字のこゝより云かける取切字と云はる一て一
解題一注其の是をかく一て事止る一と云はる
一因集三段切并似通ひらるる切ぬ白あり

白雨ハ交のやとりも勝の女

神の事洗ひて是れ云乃川

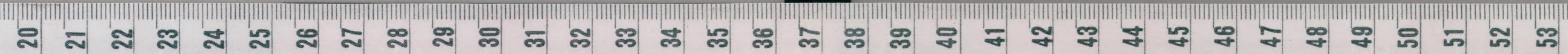
注中目自雨の自又文字より七文字の心懸一又七文字の
末のもの字のけりぬ之次の神れ事と云五文字と下れ
五文字のけりぬ又是も七文字れ末のけり字とあり一
うぬ能く味少一と云に私目是もる事後注に
あり白の心を取らるる是先白雨の白ハ

白あへるや種や高も勝の本

白ハ白あへるの日中我身ハ云小及り種も高も勝
より出るる一と云はる一と云はる一と云はる一
中の中も一切事と云はる一と云はる一と云はる一
と云はる一と云はる一と云はる一と云はる一

神の事洗ひては^敬の天の川

けるを洗ひては^敬の天の川
事の一も事也一切事と云はる一と云はる一
唯神とありて切事と云はる一と云はる一
いふ事ハけり



一 同集大也一 借字の用也

あかものうとまの目みくまは借

是あまうとまは借とあつて切るゝと書けるんは
何んはあまうとまは借とあつて切るゝと書けるんは
借してとまうとまは借とあつて切るゝと書けるんは
借してとまうとまは借とあつて切るゝと書けるんは

あらし地ノ横織乱る多々也

是乱るゝとつた一字の爲を借してとま

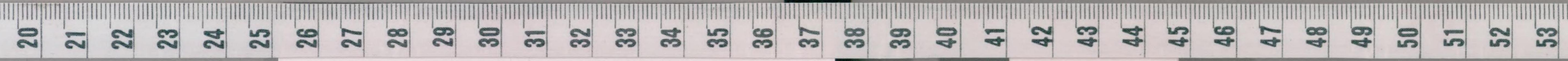
一 同集多字旅葉切の悦也

非かた非なりて久し地松の香

注目けるなとく者凡切字と尺ありあらく他者ハやて
久しと向やとあつて切るゝと書けるんは
感情の悦もつて筆下とつたりと云こ
多しりたる松多香の悦りたると書ける何の感情も
た記すは松多香の悦りたると書ける何の感情も
すり時にはその悦りたると書ける何の感情も
一 同の中多同香ありて感情の心甚深一 是類ひの
をりして一 同を五立一 白はと

一 同集多字旅葉をこめて白心切の悦也

松風ノ松多香の秋を秋の香



注目是世の事なれば一と云ふの事しめておれ
あらばも母をこゝろに思ふ切とて

「魔の書」といふは、魔の秋也

注目是世の事なれば一と云ふの事しめておれ
あらばも母をこゝろに思ふ切とて

注目是世の事なれば一と云ふの事しめておれ
あらばも母をこゝろに思ふ切とて

一 注目是世の事なれば一と云ふの事しめておれ

「注目」といふは、注目の事

けりしるも切事なれば一と云ふの事しめておれ
あらばも母をこゝろに思ふ切とて

一 和歌は歌下名の詞といふは大概おけせいでね
へぬれよちもの類もく下目よの字を添ひおける
をいふとていふ風よりけりおれおの類は
非語の早語俗候を採りおのなるよりけり
介正振くの詞ありて下名なる事とて辨ハ大方
をこそとのなほより等とて詞に抽を賞ナ
をこゝろに思ふ切とて

「注目」といふは、注目の事

花を踏む可敷口あたれ熱之際限り一皆是詞を云
浩く彼絶一切事となるされはけの連歌も此云
あはれして見ひら一湖語あり是木玉路に引ら
けキマ出らへありとあるをわけあがり切事と成り
トヤロウしてあむなもも白紙り此言は切事
御れ一切事ハ無事と事道のゆかり自由自在の事
なりは十七字の事止るらゆて切事一の落白是事
なり自ら事ありたりこの事して人ありは事
け道未熟きく世間一切者と唱らるる事
案白事の事あり切事なり一の白と仕服の
カキ

なまてはありは仕服二に誦しぬ事又一字削
てははあれ皆なちれをすり事

一花の自分三まはるりす曲白圓より八白圓に
遠くあし人一一の貴族廢棄并れあうれは曲白ま
延ぶハ切事してようはとの授るれは是ハ射の
真一まふ階のま事

一花の白の湯ゆて一花の熱擦眼ハ陰まは是又百約
一花それお揃へ故に陰れ笑を歌りてあめを

字の毎々仕まゝく濁るるの儘と云ふは、猶自
ふして是又一癖の各自に決り連続の心と云ふ
ありをて、毎々との相いらんとする一は、是等れ
と云ふは、先人の格好や、文章か、その字毎々を文
字一自の内、其格好や、記号より止まらざる
さらの爰例にせよ、て、是は、返上より返るるの
は、まゝと云ふ、其格好や、ある古人の式、其格好や、
まゝと云ふ、其格好や、ある古人の式、其格好や、
保阿や、とも、是を、母の、高直の、料、其格好や、
まゝと云ふ、其格好や、ある古人の式、其格好や、
まゝと云ふ、其格好や、ある古人の式、其格好や、

吾我、其格好や、ある古人の式、其格好や、
一、其格好や、ある古人の式、其格好や、
急の、其格好や、ある古人の式、其格好や、
味、其格好や、ある古人の式、其格好や、
高直、其格好や、ある古人の式、其格好や、
先輩、其格好や、ある古人の式、其格好や、
こま、其格好や、ある古人の式、其格好や、
と、其格好や、ある古人の式、其格好や、
是、其格好や、ある古人の式、其格好や、
其、其格好や、ある古人の式、其格好や、
其、其格好や、ある古人の式、其格好や、

廿八切字を入て時の季を憶せ入ては
はりやうはは立駈ハ又字毎月三ハてと先
かあこく心はて欠徳立甫の定られ
裡式をまのてはまの片一冊なして天下
後世に傳るるとも何れ非ざる者まのあれ
あや一老自の書畧なる白紙のしるし
有る事ととも費くまの知半片何れは是
道北野原を扱之

書林

大坂高麗橋筋壹丁目

吹田屋多四郎

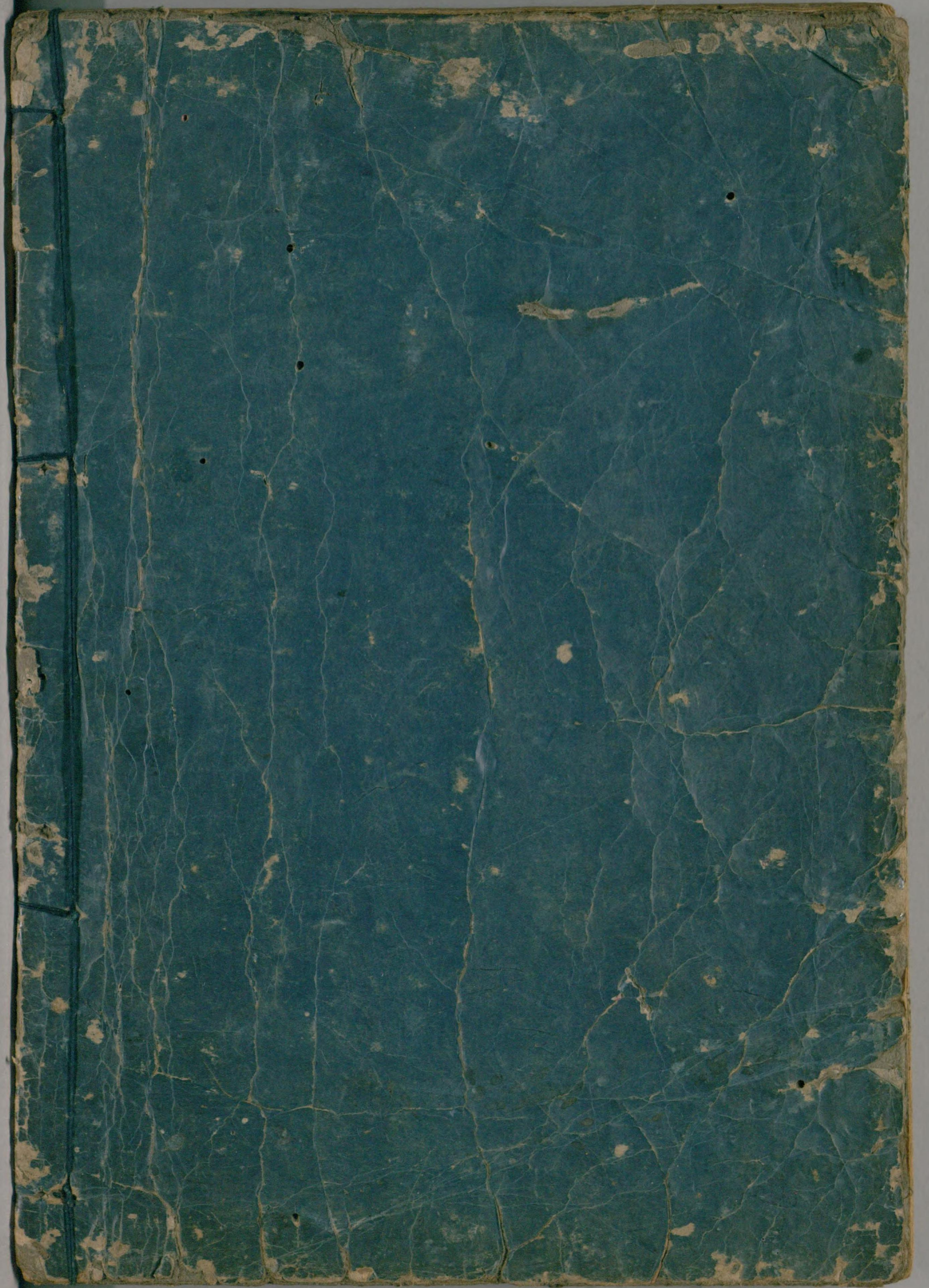
付是なるか之神様
か一書を抄く様
故人善徳寺の房
傳句に似通ひき
感一高松を
那諸塔を總する良材

863
176

14221

成るものをも身類平流に
削つゝか多しの世持止すぬれを
櫻尔、建栱にすり母に際し
速く静息良昔申先歳を秋
浪善深暮、塙正月堂誌之





国立国会図書館 タイトル『師走囊』 請求記号 863-176

ガラス使用